

《論 文》

スラッファ文書を垣間見る(2)

—スラッファとマルクス—

藤 田 晋 吾

A Glimpse of *Sraffa Papers* (2)

—Sraffa and Marx—

SHINGO FUJITA

キーワード

マルクス (Karl Marx), 転形問題 (transformation problem), 労働価値論 (labor theory of value), 生産方程式 (production equation), 標準商品 (standard commodity)

はじめに

マルクス経済学に対するスラッフィアンたちの評価は概して否定的である。ステイードマンは『スラッファ後のマルクス』(1977)において、価格が正であるにも拘わらず価値が負であるような商品の存在しうる経済モデルを提示し、マルクスの《価値》概念の不備をついた。パシネッティは、マルクスの労働価値論とは商品の価値を体化労働(商品に体化された労働)と見なす「純粹労働価値論」であり、この労働価値論はきわめて特殊な条件のもとでしか妥当しないがゆえに放棄されねばならない、と論じた。ステイードマンやパシネッティは支配労働を基準にしてマルクスの体化労働を批判しているわけである。スラッファ自身も『商品の生産』の付録Dにおいて、「標準商品が、アダム・スミスによって示唆され、そしてリカードウが断固として反対した尺度、すなわち支配労働に酷似していた」と述べているのだから、スラッフィアンがマルクスの体化労働の批判に向かうことには何の不思議もない。

しかしスラッファ自身のマルクス評価はかなり趣を異にしている。少なくとも『商品の生産』の骨格が形成されつつあった1927-28年以後においては、スラッファはマルクスを先導者

と見なしていた。スラッファ文書に直接アクセスできる立場にある論者たちがこぞって引用するのは、1927年11月の日付を持つ次のメモである。

私の仕事の究極的結果は、ヘーゲルの形而上学とその用語法をわれわれ自身の現代の形而上学とその用語法に取り替えることによって、マルクスを述べ直すことになる。……これは単にマルクスの英語への翻訳、ヘーゲルの形而上学の形態からヒュームの形而上学の形態への翻訳になるであろう。(Vivo [2003], p.7, Bellofiore [2007], p.7, D3/12/04/15)

ここでスラッファが「形而上学」という言葉で意味しているのは、通常その語で理解されるような「常識に反する」という忌避ではなく、「理論に生气を与え、理論をわがものとし、理解可能ならしめるために絶対必要なもの」である⁽¹⁾。スラッファはマルクスを読んで、マルクスの理論からその理論に生气を与えている弁証法的叙述の形態を取り除いても損なわれるものはないと予感したのである。実際スラッファは「私は怠惰なマルクス主義者だ」と言っていたらしい。しかし私が論じたいのは政治的姿勢の問題ではない。

スラッファとスラッフイアン（例えばスティードマンやパシネッティなど）との間でマルクスに対する評価が分かれるのは、転形問題に対する両者の解決法が異なるからである。スラッフイアンはスラッファの理論を全面的に支持するが、スラッファの理論のどの部分に力点を置くかが問題である。それが顕わになるのは転形問題の処理に関してである。スラッフイアンはスラッファの生産方程式に目を向け、スラッファ自身は（第2節で見るように）標準商品によって解決するのである。その違いは、前者が《価値》を「生産」の場面で定義し、後者は「交換」の場面で定義することにある。標準体系はその二つの場면을統合したものであるから、標準体系に至ってはじめてスラッファとスラッフイアンの違いは解消する。

スラッファ文書から垣間見える限りでスラッファとマルクスとの関係を見れば、マルクスの《価値》概念からいかなる「哲学的」意味（スラッファの意味での「形而上学」の意味）が切り落とされたのかが明らかになる。一本の論文の中に収めるには問題が大きすぎるので、本稿では「労働力の商品化」という論点に絞ってマルクスとスラッファの基本的違いを浮き彫りにしたい。マルクスの《価値》概念が最も際立つのは「労働力」の《価値》の規定においてである。労働力は商品だといっても、生産物商品や生産手段商品とは違って、《価値》を持つだけではなく、「生きた労働」として《価値》を生むのである。だからマルクス経済学においては「労働力」と「労働」の違いは決定的に重要である。ところがスラッファ経済学には「労働量」があるだけで、「労働力」という概念は存在しない。この違いこそが、「形而上学」の取り替えによって生じる最大の帰結である。

本稿の構成は次のとおりである。第1節では、上述のパシネッティとスティードマンのマルクス批判を回顧し、そのポイントをできるだけ簡潔に整理する。第2節では、スラッファ文書から明らかになったところの転形問題に対するスラッファの解答を検討し、スラッファの

「標準商品」がマルクスの《価値》の代替物になっていることに注意を喚起する。第3節は、労働価値論を「労働力商品」に焦点を当てて論ずる。「労働力商品」という概念は、スラッファが「ヘーゲルの形而上学とその用語法を現代の形而上学とその用語法に取り替えることになろう」と予想したその「形而上学の取り替え」によってマルクスの経済学から失われるものの一つであるが、それが逆にスラッファに対してどのような反作用を及ぼしたかを見るつもりである。

1 スラッフイアンのマルクス批判

パシネッティとスティードマンに共通するマルクス批判は、マルクスの《価値》とは「体化労働」だとする点にある。日本では「体化労働」ではなく「投下労働」という用語の方が一般的である。用語の選択は自由であるが、「支配労働」との対比を明確にするためには「体化労働」の方が適切であるように思われる。というのは、「投下労働」をたんに「生産に投下された労働」と解し、どんな生産にも労働が投下されるという自明の事実を訴えて、労働はすべて「投下労働」だと早合点されるかもしれないからである。いずれにせよ「体化労働」ないし「投下労働」の実質的定義は、次の価値決定方程式によって与えられている。

$$(1.1) \quad \lambda_i = \sum a_{ij} \lambda_j + L_i$$

これに対して「支配労働」は、(1.2)で定式化されるスラッファの生産方程式によって決まる《生産価格》を考慮に入れて、(1.3)式によって定義される。スラッファの生産方程式によって「支配労働」を定義するのは、本節の目的がスラッフイアンのマルクス批判を見ることにあるからである。

$$(1.2) \quad p_i = (1+r) \sum a_{ij} p_j + L_i w$$

$$(1.3) \quad \gamma_i = (1+r) \sum a_{ij} \gamma_j + L_i$$

直ちに分かるように、(1.3) 式は (1.2) 式を w で除したものにすぎない。すなわち、

$$(1.4) \quad \gamma_i = p_i/w$$

であり、これが「支配労働」の本来の定義である。

さて、(1.3) 式において $r=0$ である場合には、次式が得られる。

$$(1.5) \quad \gamma_i = \sum a_{ij} \gamma_j + L_i$$

(1.5) 式は、 γ_i と λ_i との記号の違いを除けば、(1.1) 式と同じである。これは、価値決定方程式に基づく体化労働が、利潤率ゼロである場合の支配労働から形式の上では区別できないということの意味する。パシネッティとステイードマンが彼らのマルクス批判の論拠にしているのは、(1.1) 式と (1.5) 式との形式上の無差別性である。

ステイードマンが「価格が正であるにも拘わらず、負の価値を持つ」ような商品の具体例は、商品「a」と商品「b」からなる次表のような結合生産である。

	商品a	商品b	労働	→	商品a	商品b
プロセス1	5	0	1	→	6	1
プロセス2	0	10	1	→	3	12
	5	10	2		9	13

これをスラッファの生産方程式で表現すれば次の連立方程式になる。

$$(1.6) \quad 5p_a(1+r)+w=6p_a+p_b$$

$$(1.7) \quad 10p_b(1+r)+w=3p_a+12p_b$$

独立の方程式2個に対して未知数が4個であるが、もし w を「1単位の労働につき商品「a」が1/2、商品「b」が5/6」という実質賃金で与えれば、すなわち

$$(1.8) \quad w = (1/2)p_a + (5/6)p_b$$

と置けば、3個の方程式 (1.6), (1.7), (1.8) から r , p_a , p_b の値が決まる。計算の結果は $r=20\%$, $p_a=1/3$, $p_b=1$ である。

次に、表1の結合生産を価値決定方程式によって表現すれば、

$$(1.9) \quad 5\lambda_a + 1 = 6\lambda_a + \lambda_b$$

$$(1.10) \quad 105\lambda_b + 1 = 3\lambda_a + 12\lambda_b$$

という連立方程式になる。これを解くと、 $\lambda_a = -1$, $\lambda_b = 2$ となり、商品「a」は負の《価値》を持つことになる。つまり、商品「a」は正の価格を持つが、その《価値》は負なのである。もしもマルクスの《価値》が体化労働であり、体化労働が価値決定方程式によって計算されるとすれば、負の《価値》とは負の労働だということになる (Steedman [1977], pp.150-155)。しかし「負の労働」は無意味な概念である。

このようなステイードマンの議論がマルクスに対する批判となりうるためには、次が前提されねばならない。

【前提】 マルクスの《価値》は、 $r=0$ におけるスラッファ生産方程式によって計算される。

この【前提】は次の2つを含んでいる。

- (a) マルクスの《価値》は価値決定方程式によって計算される。
- (b) 価値決定方程式は利潤率ゼロの場合におけるスラッファ生産方程式に他ならない。

この2つの前提ははたして適切であろうか。マルクスの《価値》概念について共通理解が欠けている今の段階では、(a)が適切かどうかについての解答は保留して、(b)の検討から始めたい。(b)は初端から不適切に見える。その理由は、ステイードマンの例は、「利潤率が $0 < r \leq R$ のとき価格が正であるが、 $r=0$ のとき《価値》が負になる」ような商品が存在しうること

を示す例としてではなく、たんに「利潤率が $0 < r \leq R$ のとき価格が正であるが、 $r=0$ になると価格が負になる」ような商品が存在しうること示す例だと見なした方が自然だからである。 $0 < r \leq R$ のときは価格であったものが、 $r=0$ になると《価値》に変わると見なすのは、概念的相違を数学的形式の外衣によって隠蔽することであるように見えるのである。

実際、拙論「体化労働、支配労働、標準商品」で論じたように、スラッフアの生産方程式によって決まるのは支配労働であって、体化労働ではない。重複を最小限にして結論だけを述べれば、私の議論は次のようになっている。パシネッティはスラッフアの生産方程式を一般化して、《価値》を次のように定義した。

$$(1.11) \mathbf{v} \equiv \mathbf{a}_{[n]}(\mathbf{I} - \mathbf{A})^{-1}$$

この \mathbf{v} は確かに体化労働のように見える。なぜならば、 $\mathbf{a}_{[n]}(\mathbf{I} - \mathbf{A})^{-1}$ は価値決定方程式を行列表示した $\mathbf{\Lambda} = \mathbf{A}\mathbf{\Lambda} + \mathbf{L}$ の解

$$(1.12) \mathbf{\Lambda} = \mathbf{L}(\mathbf{I} - \mathbf{A})^{-1}$$

と同じものを指示しているからである。また $\mathbf{a}_{[n]}$ は生産物 1 単位あたりの投入労働量であり、純生産量を \mathbf{Y} と置けば、 $\mathbf{a}_{[n]}\mathbf{Y} = \mathbf{L}$ であるから、価値決定方程式に現われる労働が体化労働である限り、 \mathbf{v} は体化労働である。ところが、この \mathbf{v} と価格 \mathbf{p} との関係は次式のようになる。

$$(1.13) \mathbf{p} = \mathbf{v} + \mathbf{v}_k r + \mathbf{v}_{k2} r^2 + \mathbf{v}_{k3} r^3 + \dots$$

(ここで下付添字の k, k_2, k_3, \dots は活字入力限界のためであり、実際には k, k^2, k^3, \dots である。これは n 期前の生産手段を合成商品で表現したものである)。(1.13) 式はスラッフアの「日付のある労働」への還元：

$$(1.14) \mathbf{A}p_a = L_a w + L_{a1} w(1+r) + L_{a2} w(1+r)^2 + L_{a3} w(1+r)^3 + \dots$$

の一般化である。(1.14) 式に現われる w が (1.13) 式に登場しないのは、 w をニューメレルにしている（それゆえ、 \mathbf{p} は支配労働を表わしている）からである。

パシネッティ ([1989], p.386) は (1.13) 式をもってマルクスの《転形問題》に対する解決だと見なし、脚注で次のように記している。

(1.13) の表現は、……マルクスの《転形問題》に対する反復計算による解をも表現していることになる。だからマルクスが《価値》から出発してそれに基づいて利潤を直接計算できるだろうと感知したとき、結局のところ、彼は道を誤っていなかったのである。しかし、長い反復プロセスが必要なのに、彼は一跨ぎでその問題に決着をつけようとした。

マルクスの転形表は、《価値》から出発し平均利潤率の形成にともなって《価値》が生産価格へと逐次的に転形する最初の段階だけを計算したもので、彼の転形手続きの一般式がいかなるものであったかは推測の域を出ない。しかしパシネッティのように「(1.13) の表現が、……マルクスの《転形問題》に対する解を表現している」と主張することはできない。《価値》の生産価格への転形は、確かに、(1.13) 式や (1.14) 式のように生産期間を時間的に遡って、過去の生産手段を逐次的に「日付のある労働」に還元することと同等である。そして (1.13) 式は確かに \mathbf{v} を \mathbf{p} に変換する変換式である。しかしこの \mathbf{v} も \mathbf{p} もスラッフアの生産方程式の一般化であって、(1.14) 式が $r=0$ のとき価値決定方程式からの「日付のある労働」への還元、すなわち

$$(1.15) \lambda_a = L_a + L_{a1} + L_{a2} + L_{a3} + \dots$$

になるのと同様、スラッフアの生産方程式が $r=0$ のとき価値決定方程式に形式上一致するという事実を確認しているにすぎない。だから、

「 $0 < r \leq R$ のときは価格であったものが、 $r = 0$ になると《価値》に変わると見なすのは、概念的相違を数学的形式の外衣によって隠蔽することであるように見える」という先に述べた批判は、パシネッティについても同じように妥当する。パシネッティは転形問題ではなく、言うなればスラッファの転形アルゴリズムを論じているにすぎない⁽²⁾。

そうすると、マルクスの《価値》とスラッファの「生産価格」との概念的相違を明確に述べる必要に迫られる。しかし、もし「語は命題の脈絡の中でのみ意味を持つ」というフレーゲの格率—この格率は、議論の主題が哲学であろうと科学であろうと、言葉の意味をイメージだととらえる幼稚さから抜け出すための原則である—を順守するならば、《価値》概念を把握するためにわれわれは「本書（『資本論』第1巻）の全体を読まなければならない」（マルクス）ことになる。だが『資本論』を何度繙いても、マルクスの《価値》概念を正当化することにはならない。そういう次第で私は拙著『スラッファの沈黙』（2001）において、 $r = 0$ の場合のスラッファの生産方程式によって決まる「生産価格」ではなく、彼の発見した「不変の価値尺度」たる標準商品をもってマルクスの《価値》の代用と考えるよう提案した。標準商品を価値尺度にとれば、《価値》から生産価格への転形問題がきれいに解決されるからである。しかし、私のこの提案は全然といってよいほど理解されなかった。

松本 [2005] は、スラッファ体系には「労働価値」は存在しないから、そもそも転形問題は生じないと批判した。最近インターネット上で片桐幸雄が松本とは正反対の方向から批判をしていることを知った。その後同氏の『スラッファの謎を楽しむ』（2007）で該当箇所を披見したところ、その批判は次のようであった。

スラッファは、マルクス経済学の大問題であった（価値から生産価格への）転形問題に沈黙したとされる。そしてその理由として、

スラッファはマルクスの「価値」を棄てているのだから、スラッファにとってはそもそも「転形問題は存在しない」からだとされることがある（藤田 [2001] 79頁）。しかし剰余と商品価格の同時決定にかかる上述の指摘はスラッファが転形問題に沈黙していることを意味しない。「沈黙した」と受けとめられたのは、寡黙なスラッファが、剰余と商品価格の同時決定の持つ意味を明示しなかったからではないのか。（なお、スラッファがマルクスの「価値」を棄てていたという藤田の主張には賛同できません。スラッファは、生産価格の分析には価値概念を持ち込みませんでした。それは直ちに価値概念の放棄を意味するとは思えないからです）。（片桐 [2007], 97頁、括弧内はインターネットの「ちきゅう座・スタディールーム」による）

片桐のそもそもの誤解は、スラッファの「剰余と商品価格の同時決定の自己矛盾」という論点を、「利潤率と商品価格の同時決定」と混同していることにある。単純な論点を誤解するから、スラッファは「謎」だらけになるのである。利潤率を知るには商品価格が知られていなければならない、商品価格を知るには利潤率が知られていなければならないというのは、矛盾ではなく循環である。この循環は、利潤率と商品価格との同時決定によって解決する。上記の引用は、片桐 [2007] のⅢ章2節「〈剰余が出てくると、その体系は自己矛盾をはらむ〉とはどういう意味か」に含まれているが、スラッファの主張は「剰余が出てくると、独立した方程式の数が未知数の数より一つ多くなるから、その体系は自己矛盾をはらむ」ということにすぎない。

このパラグラフは原著の『商品の生産』では僅か8行で終わっていて、締め文は「§3でやったように計算すると、いまや $(k-1)$ 個の未知数しか持たない k 個の方程式が存在することになる」である。§3の「極端に単純な社会」では独立の方程式の数と未知数の数はともに

($n-1$) 個である。独立方程式の数が未知数の数より多ければその連立方程式が矛盾をはらんでいることは、初等的な数学的事実である。片桐がこの簡単な数学的事実を知らないか、あるいは、 k 個の商品価格の全部を要求しているのである。だが、もし k 個の商品価格がすべて決まるとすれば、その価格の貨幣単位は何なのか。いずれにせよ片桐が「剰余と商品価格の同時決定」というとき意味しているのは、「利潤率と商品価格の同時決定」である。そして同時決定されるのは、利潤率と ($k-1$) 個の相対価格である。明快な論理を「謎」だと言いつけるのは知的退廃の予兆である。

また括弧で括られた引用部分も、マルクスの《価値》が体化労働であるのに対し、スラッファの「価値」が(ステイードマンとパシネッティを例にして先に論じたように)支配労働であるという肝腎のポイントを見落としたがゆえの、的外れの批判である。片桐は「小体系」に関する松本 [1987] の解説に基づいて、スラッファの「価値」は体化労働だと信じているが、スラッファの「価値」が支配労働であることは『商品の生産』 §43を見れば明らかである。ここでは、標準純生産物の代わりに「標準純生産物によって購買しうる労働量」という「いっそう明白な尺度が利用できる」とはっきり述べられている。他方、私が『スラッファの沈黙』で主張したのは、ステイードマンのように体化労働を支配労働の極限の場合 ($r=0$ の場合) と見なすべきではなく、スラッファの標準商品をマルクスの《価値》の代替物だと見なすべきだ、ということである。

転形問題が生じるのは、価値が価格の似姿であり第一近似である限りでのことである。標準商品は「不変の価値尺度」であるが、それ自体は価値ではなく、異種商品の数量比であるにすぎない。数量比であるにすぎぬものがそれでも価値尺度でありうるのは、総生産、総生産手段、総純生産のいずれも標準商品のみでできているからである。スラッファ

の標準商品は、純産出の利潤と賃金への分割に依存して決まるところの価格から、完全に切断されている。マルクスにおいては、部門間の資本構成の均等性あるいは資本構成が中位であるような部門の「平均的商品」が価値計算の妥当性の根拠であるから、彼の価値計算体系はスラッファにおける標準体系に対応する。両体系が同一の現実の体系の理想化でありながら、前者が転形問題を孕むのに対し後者がそうでないのは、平均的商品は、その「価格」が「価値」と一致すると約束されているだけで、依然として現実の(あるいは現実に近い)商品であり続け、他の商品と同じように「価値」と「価格」を持つのに対し、標準商品は「価値」も「価格」も必要としないからである。それにもかかわらず、「現実の体系は標準体系と同じ基礎方程式からなっている」から、ひとたび賃金が与えられるならば現実の体系も標準体系も同一の相対価格が決まるのである。スラッファは、不変の価値尺度たる標準商品によってマルクスの「平均的商品」を追放したがゆえに、「転形問題は存在しない」と断言できたのである。(藤田 [2001], 58頁)

これが拙著第2章第2節「スラッファの標準商品」の結びであり、続く第3節「正の価格、負の価値」は、スラッファの生産方程式の極限の場合をもってマルクスの《価値》決定法と見なすステイードマンを批判することに充てられている。ステイードマンはスラッフィアンとしてマルクス批判を試みたので、拙著第2章3節の末尾はこうなっている。

スラッファがステイードマンのマルクス批判を読んだかどうかは判然としない。しかし、もし上述のわれわれの議論が間違っていなければ、たとい読んだとしても沈黙することを選んだであろう。かれはマルクスの「価値」を棄てているのだから、「転形問題は存在しない」。スラッファをベースにしたス

ティードマンのマルクス批判（それがかれの公約であった）は、ポイントを逸している。何を語ることがあろうか。——これがかれの心境であったに違いない。以上が、私に推測しうる限りでの、スラッファの沈黙の理由である。（同、79頁）

「彼 [スラッファ] がマルクスの《価値》を棄てている」理由は、第2節「スラッファの標準商品」ですでに述べ終わっているのである。もし標準商品に言及しないならば、マルクスの《価値》が不要になる理由はまったく理解されないであろう。片桐は「スラッファはマルクスの労働価値論を否定したのではなく、むしろ労働価値論の厳密な証明への途を示したと考えた方がいいのではないか」と提案しているが、労働価値論を論ずるためには、同氏が陥っている概念上の混乱をあらかじめ取り除いておく必要がある。この問題は、第3節であらためて検討することにしたい。

2 転形問題に対するスラッファの解答

私はスラッファ文書に直接アクセスできた論者たちの引用によってその文書のごく一部を垣間見るだけであるが、昨年インターネット上で偶然見つけたベッロフィオーレの論文「マルクス後のスラッファ：未解決の争点」（2007）によって、スラッファが転形問題について文書を遺していることを知った。前章「スラッファ文書を垣間見る(1)」の注でその一部を引用したが、本稿では前後の脈絡を入れて訳出しておきたい。ベッロフィオーレによれば、いずれも1960-61年に書かれた文書である。価値から生産価格への転形についての問題設定は同じではないが、最終的に標準商品がその解決点とする点は『スラッファの沈黙』の主張とまったく同じである。

[I] うるさい反論家は言う。（利潤と賃金の比率） 剰余価値率は価値では100%である

が、現在の生産価格で計算すれば150%である。どちらが正しいのか？

さてマルクスは、私が思うに、この問いを拒否するであろう。彼は、これらの総計量の比率が価値であろうと価格であろうと近似的に不変だという仮定に、自分のシステムは基づいているのだと言うであろう。そしてそのような乖離は事実上起こらないのだ、と。

今でも事実上正しいとはいえ、100年間の猛攻に晒された後の現在においては、この返答は十分なものだとは見なされていない。正面から向き合わねばならないのだ。

そしてもしそのような状況が起これば、「価格」比率が正しい比率であろうことは明らかである。事実上、労働者は国民所得の40%を手に入れる。彼らがそれを何に費やすかは「効用」による。彼らが彼らの40%を有機的構成の高い商品に費やすか低い商品に費やすかは、搾取の度合いに影響を与えない。このことから私は、適切な剰余価値率は「価格」で評価されるべきだと結論する。（Bellofiore [2007], p.18. D3/12/111, 138)

[II] マルクスの命題は、商品の大きな総計量（賃金、利潤、不変資本）が無作為抽出によってできていて、そのためそれらの総計量の比率（剰余価値率、利潤率）は、「価値」で測定されようが任意の剰余価値率に対応する生産価格で測定されようが、近似的に同じであるという仮定に基づいている。

これは明らかに真であり、もしうるさい反論家が現われ、仮想的な乖離を想定するようなことをしなければ、人はそれをそのままにしておいたであろう。反論家はこう言うのだ：資本家が彼らの消費を（総計の価格が同じままで）有機的構成のより高い商品に切り替えると仮定せよ。もし「価値」で計算すれば剰余価値率は下落するが、生産価格では不変であろう。どちらが正しいのか？——多くの類似のパズルを考案することができよう。

[もっとうまい例はこうである。資本家は

彼らの消費の一部を有機的構成の低い商品から高い商品に切り替え、労働者は彼らの消費を、同じ程度に、高い方から低い方に切り替えた。それぞれの総計の価格は不変である……]。

マルクスの諸命題がそのような乖離を扱うことを意図したものでないことは明らかである。それらの命題は、諸総計量が或る平均的な構成になっているという（一般的に正しい）仮定に基づいている。これは一般に事実上正しく、かつ細部に適用されることを意図したのではないのだから、何の問題もない。

うるさい反論家が現われるまでは、それで十分間に合った。たんに近似的なだけでない正確な結果を与えるためには、その構成が一致すべき平均はいかなるものであるべきか。もしこれを定義しなければならぬとすれば、それは標準商品である。……

ところでこの平均は何へと「近似する」のか。つまり、それが正確に標準商品であるためには、その平均は何から構成されていなければならないのか（その平均はどのような重みづけられた平均であるべきか）。

すなわち、マルクスは賃金と利潤が近似的に標準商品の量からできていると仮定しているのだ。(Bellofiore [2007], p.17. D3/12/111, 140)

[Ⅲ] リカードウの『原理』第1版と第3版との間に矛盾がないように、マルクスの『資本論』第1巻と第3巻との間に矛盾は存在しない。どちらの場合も著者は、すべての生産物が労働者のものになる（あるいは、種々の部門で充当される資本に差別がない）という仮定に立って、原始社会における個別的商品の交換に適用された労働価値論を以て始める。それらの価値は次に、剰余を均等な利潤率に従って諸資本家間に分配することを考慮して、修正される。交換価値は、相異なる諸商品の生産における1単位労働当りに充当

される資本量の大小に応じて、調整される。いくつかの商品価格は上昇し、他の諸商品の価格は下落する。しかし、もし個別的商品の価格ではなく、大きな総計量の価値（例えば、国民総生産、国民総所得、社会的剰余、総賃金：すなわち、分配論、剰余の決定、一般的利潤率の計算を扱うとき有用になる諸量）を考える場合には、諸価格の揺れは近似的に平均化し、総計量は再び労働価値によって測定できることになる。リカードウが彼の著書の第3版で行なったのはこれで、かれは、価格がほとんど賃金だけから構成される商品と、価格が主として利潤に基づく商品との「ちょうど中間」にある商品を「不変の価値尺度」として選んだのである。マルクスは価値の生産価格への転形によって同じ結果に行き着いたが、彼はそのとき個別部門の特殊的利潤率の平均として導出される一般的利潤率を使っている。私が「標準商品」と呼んだものは、あまり受け入れられていないが、この問題を近似的にではなく、正確に解決するための道具として提出されたのである。それはリカードウが欲した中間的地位を埋め、彼がその謎を解くために求めた「不変性」要求を満たす。しかも、はじめに与えられた現実体系の連立方程式が、労働量が同じになるようにして〔標準体系に——引用者〕還元されるならば、標準体系の諸係数は個別利潤率につけられる「重み」になり、その加重平均は一般的利潤率に正確に一致する。(Bellofiore [2007], p.16. D3/12/111, 149-51)

[] 内の番号は参照の便宜上私がつけたものである。[Ⅰ]と[Ⅱ]は『商品の生産』を書評したイトンへの返信の下書きであり、[Ⅲ]はナポレオーニの書評に対する（公表しなかった）返信である。しかしここではイトンやナポレオーニの書評には立ち入らない。

スラッファがイトンやナポレオーニの具体的な疑問・批判に立ち入らないで、こんにち転形問題と呼ばれている問題に正面から答えたの

だと仮定することにすれば、上記の引用は次のように読むことができよう。[A] は転形問題の設定、[B] は標準商品による解決、[C] は結論である。

[A] マルクスは、すべての生産物が労働者のものになる（あるいは、すべての部門で資本の有機的構成が同じである）という仮定に立って、原始社会における個別的商品の交換に適用された労働価値論を以て始める。それらの《価値》は次に、剰余を均等な利潤率に従って諸資本家間に分配することを考慮して、生産価格へと修正される。ある商品価格は《価値》より高くなり、他の諸商品の価格は《価値》より低くなる。だから、個別の商品の《価値》と価格には乖離が生ずる。しかし、もし個別の商品の価格を考えるのではなく、大きな総計量の《価値》（総価値、総剰余価値、剰余価値率など）を考える場合には、諸商品価格の揺れは近似的に平均化し、総計の価格（総生産価格、総利潤、一般的利潤率など）は再び《価値》によって測定されることになる。したがって、総価値＝総生産価格であり、総剰余価値＝総利潤である。

[B] たんに近似的なだけでなく正確な結果をえるためには、その構成が一致すべき平均はいかなるものであるべきか。もしこれを定義しなければならぬとすれば、それは標準商品である。私が「標準商品」と呼んだものは、この問題を近似的にではなく、正確に解決するための道具として提出されている。それはマルクスが要請した「中位の資本構成」を満たし、リカードウが要求した「不変性」要求を満たす。しかも、はじめに与えられた現実体系の連立方程式が、総労働量が不変であるようにして標準体系に還元されるならば、標準体系の諸係数は個別の利潤率につけられる「重み」になり、その加重平均は一般的利潤率に正確に一致する。

[C] すなわち、マルクスは賃金と利潤が近似的に標準商品の量からできていると仮定しているのだ。

[A] は問題設定としては不十分である。その理由は、解答が「総価値＝総生産価格」、「総剰余価値＝総利潤」という近似解だからである。転形問題が無視しえない理由は、もしも「総価値＝総生産価格」の前提のもとで「総剰余価値＝総利潤」が成立しないとすれば、剰余価値論（搾取論）が危うくなり、逆に、「総剰余価値＝総利潤」であるとき「総価値＝総生産価格」が成り立たないとすれば、《価値》が価格を規定するとは言えなくなるであろうからである。だからこれは、《価値》が価格の統計的近似であるか否かという事実問題ではなく、概念としての資格を持つか否かという権利問題である。言い換えれば、《価値》が経済学の基本概念でありうるか否かという問題である。実際、ポルトキエヴィッチ以来のマルクス批判家の主張はすべて「《価値》概念を放棄せよ！」であった。

それでは《価値》とは何か。スラッフアは「マルクスは、すべての生産物が労働者のものになるという仮定に立って、原始社会における個別の商品の交換に適用された労働価値論を以て始める」という。「原始社会 (primitive society)」とは、英語版『商品の生産』の第1章冒頭の「ちょうどそれ自体を維持するだけのものを生産するような極端に単純な社会 (extremely simple society)」であろう。イタリア語版では“società primitiva”と訳されているからである。もしこの原始社会で3商品「a」「b」「c」が生産されるとすれば、この社会の生産は次の連立方程式に従う。記号法は『商品の生産』のそれに従う。

$$(2.1) \quad \begin{aligned} A_a p_a + B_a p_b + C_a p_c &= A p_a \\ A_b p_a + B_b p_b + C_b p_c &= B p_b \\ A_c p_a + B_c p_b + C_c p_c &= C p_c \\ \text{ただし、} A_a + A_b + A_c &= A, B_a + B_b + B_c = B, \end{aligned}$$

$C_a+C_b+C_c=C$ である。

但し書きの条件によって3個の方程式の1個は他の2つから導かれるから、独立の方程式は2個で、未知数は、 p_a, p_b, p_c の3個である。したがって、求まるのは3つの商品の相対価格である。3商品の交換は、交換によってどの生産者にも損得は生じないのだから、 $Ap_a=Bp_b=Cp_c$ を満たさなければならない。だからこの相対価格は A, B, C の逆数どうしの比に等しい。逆に、 $(A:B:C)$ の比は相対価格の逆数どうしの比に等しい。それゆえ、相対価格が商品の交換比率であるのと同等の資格で、それらの生産量の数量比 $(A:B:C)$ も交換比率を表現できる。この数量比は、いわゆる「労働価値」への言及をまったく含まないから、それがマルクスの《価値》でないことは当然であるが、少なくともその必要条件である。

次に、「ちょうどそれ自体を維持するだけのものを生産するような」経済ではなく、剰余が存在する経済を考えるならば、その生産は次の連立方程式に従うであろう。

$$(2.2) \quad \begin{aligned} (A_a p_a + B_a p_b + C_a p_c)(1+R) &= A p_a \\ (A_b p_a + B_b p_b + C_b p_c)(1+R) &= B p_b \\ (A_c p_a + B_c p_b + C_c p_c)(1+R) &= C p_c \end{aligned}$$

剰余が存在し、次の条件を満たすならば、

$$(2.3) \quad \begin{aligned} (A_a + A_b + A_c)(1+R) &= A \\ (B_a + B_b + B_c)(1+R) &= B \\ (C_a + C_b + C_c)(1+R) &= C \end{aligned}$$

R は標準比率と呼ばれる。 R は生産手段と剰余(純生産量)の比率、すなわち

$$(2.4) \quad \frac{A - (A_a + A_b + A_c)}{A_a + A_b + A_c} = \frac{B - (B_a + B_b + B_c)}{B_a + B_b + B_c} = \frac{C - (C_a + C_b + C_c)}{C_a + C_b + C_c}$$

である。そして、(2.4)式の条件を満たすような3商品「a」「b」「c」からなる合成商品を標準商品と呼ぶ。標準商品は、生産量、生産手段量、純生産のすべてにおいて3商品が同じ比率で含まれる合成商品である。すなわち、

$$(2.5) \quad (A:B:C) = \{(A_a + A_b + A_c) : (B_a + B_b + B_c) : (C_a + C_b + C_c)\} = \{[A - (A_a + A_b + A_c)] : [B - (B_a + B_b + B_c)] : [C - (C_a + C_b + C_c)]\}$$

である。この場合も $Ap_a=Bp_b=Cp_c$ を満たさねばならないから、 $(A:B:C)$ の比は商品「a」「b」「c」の相対価格の逆数どうしの比に等しい。(2.1)式で表現した「極端に単純な社会」の生産は、(2.3)式の特例ケース($R=0$ の場合)である。

[B]は、上のような性質を持つ標準商品が転形問題を「近似的にはなく正確に解決するための道具として提出されている」と主張している。現実の経済においては、すべての部門で同様であるような標準比率 R は存在しないであろうから、各部門の生産は次のような方程式に従っているものとする。 r_a, r_b, r_c は個別的な特殊的利潤率であり、 $r_a \neq r_b \neq r_c$ と仮定する。

$$(2.6) \quad \begin{aligned} (A_a p_a + B_a p_b + C_a p_c)(1+r_a) + L_a w &= A p_a \\ (A_b p_a + B_b p_b + C_b p_c)(1+r_b) + L_b w &= B p_b \\ (A_c p_a + B_c p_b + C_c p_c)(1+r_c) + L_c w &= C p_c \end{aligned}$$

(2.6)式の体系から標準商品を構成するためには、特殊的利潤率 r_a, r_b, r_c に適当な「重み」 g_1^*, g_2^*, g_3^* をつけ、

$$(2.7) \quad g_1^* r_a = g_2^* r_b = g_3^* r_c$$

となるように利潤率を均等化する。そうすると当然、各商品の生産量とそれぞれの商品の生産に使われる生産手段の量も変わる(生産方法は変わらないと仮定する)から、各方程式の調整のために乗数 q_a, q_b, q_c をつけ、(2.6)式を次のように修正する。

$$(2.8) \quad \begin{aligned} q_a(A_a p_a + B_a p_b + C_a p_c)(1 + g_1^* r_a) + q_a L_a w & \\ & = q_a A p_a \\ q_b(A_b p_a + B_b p_b + C_b p_c)(1 + g_2^* r_b) + q_b L_b w & \\ & = q_b B p_b \\ q_c(A_c p_a + B_c p_b + C_c p_c)(1 + g_3^* r_c) + q_c L_c w & \\ & = q_c C p_c \end{aligned}$$

$w=0$ とおけば労働量の項は消え、均等利潤率は最大利潤率 R になる。その上で(2.8)式の左辺の行と列を置き換えれば、(2.3)式に対応する次式がえられる。

$$(2.9) \quad \begin{aligned} (q_a A_a + q_b A_b + q_c A_c)(1 + R) & = q_a A_a \\ (q_a B_a + q_b B_b + q_c B_c)(1 + R) & = q_b B_b \\ (q_a C_a + q_b C_b + q_c C_c)(1 + R) & = q_c C_c \end{aligned}$$

方程式が3個で未知数は4個であるが、これに「労働量を不変に保つ」という条件、

$$(2.10) \quad L_a + L_b + L_c = q_a L_a + q_b L_b + q_c L_c = 1$$

を付け加えれば、未知数 R 、 q_a 、 q_b 、 q_c はすべて決定する。(ちなみに、(2.10)式の最右辺は総労働量を尺度にとるということであり、これは標準純生産に等しい)。 q_a 、 q_b 、 q_c の解を q_a^* 、 q_b^* 、 q_c^* と書けば、「重み」がつけられた特殊の利潤率は、賃金・利潤率の基本式：

$$(2.11) \quad r = R(1 - w)$$

を使うと、例えば商品「a」の場合には次のようになる。分数部分が最大利潤率(=標準比率 R^*)である。

$$(2.12) \quad g_i^* r_a = \frac{q_a^* A - (q_a^* A_a + q_b^* A_b + q_c^* A_c)}{q_a^* A_a + q_b^* A_b + q_c^* A_c} (1 - w)$$

商品「b」「c」の場合も同様であり、しかもそれらは均等利潤率としてすべて同じ値を持つから、「標準体系の諸係数は個別的利潤率につけられる〈重み〉になり、その加重平均は一般的

利潤率に正確に一致する」。

こうして、一般的利潤率はマルクスのような逐次転形方式に依らずにえられるが、一般的利潤率が成立しても《価値》と生産価格の乖離は生ずるのではないかと疑われるかもしれない。だから、総計量は《価値》で算定しても生産価格で算定しても一致するということの(すなわち、総計一致の二命題の)証明が別に必要であるように思われる。スラッフア文書の上記引用文中にはこの点についての言及がない。しかし「もし個別的商品の価格ではなく、大きな総計量の価値(例えば、国民総生産、国民所得、社会的剰余、総賃金：すなわち、分配論、剰余の決定、一般的利潤率の計算を扱うとき有用になる諸量)を考える場合には、諸価格の揺れは近似的に平均化し、総計量は再び労働価値によって測定できることになる」と述べているのだから、この問題は標準商品によって「正確に解決する」ことが可能だと考えているのである。

具体性を欠くが、最も簡潔な解答は『商品の生産』§30の次の文に含まれている。「標準体系において商品の数量間の比率として求められた同じ利潤率が、現実の体系においては総計的な価値の比率から出てくるであろう」。これは、標準体系においては乗数(q_a^* 、 q_b^* 、 q_c^*)によって、現実の体系においては価格(p_a 、 p_b 、 p_c)によって、異種商品が同質化され、(2.11)の基本式「 $r = R(1 - w)$ 」が成立するということである。標準商品をマルクスの《価値》の代替物と見る私の解釈では、スラッフアの謂う「価値の比率」は「価格の比率」であり、「数量間の比率」こそが《価値》である。標準体系において標準比率であるところの R^* は、現実の体系においては最大利潤率 R として現われるからである。いずれの場合にも「 $r = R(1 - w)$ 」は妥当するが、この関係式を変形して「 $(r/R) + w = 1$ 」と書けば、これは、 $(r/R : w)$ の比率で、標準純生産物を利潤と賃金とに分割することを意味している。賃金と利潤との分割比は、標準商品の分割比で表現しようが価格の

比率で表現しようが、同じである。

3商品「a」「b」「c」からなる標準商品を相似な三角形で表わすことにすれば、「総価値＝総生産価格」のとき「総剰余価値＝総利潤」が成立することは、次のように図解できる。

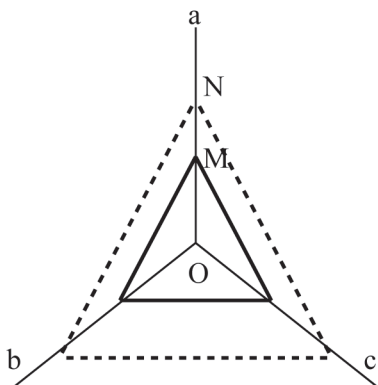


図1 標準商品

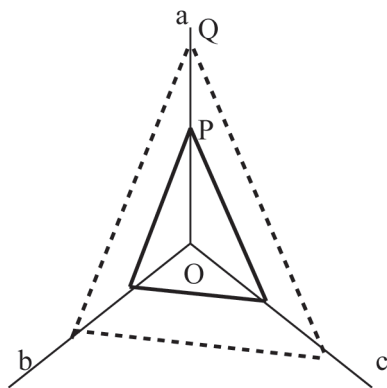


図2 転形後

原点Oから商品「a」「b」「c」の座標軸を引き、3頂点をそれぞれの座標軸上にとって、たがいに相似な2つの3角形をえがく。点線の3角形は総生産、実線の3角形は総生産手段を表わすものとする。図1の標準商品を表わす3角形は、生産価格で表示すればすっかり形を変え（どのように変わるかは利潤率 r の値に依存する）、図2の3角形に変わる。しかしそれでも、同じ座標軸上に位置する2つの頂点の原点からの長さの比は、図1と図2で同じである。例えば、生産手段として使われる商品「a」の

総生産量 \overline{OM} と商品「a」の総生産 \overline{ON} の比は、それらを生産価格で表示した \overline{OP} と \overline{OQ} の比に等しい。商品「b」、商品「c」についても同様である。また、どの商品の純生産（例えば商品「a」の純生産は \overline{NM} である）も $(r/R : w)$ の比率で分割されるから、これらの分割点もまた、図1でも図2でも、それぞれの相似3角形の頂点となる。したがって総計一致の二命題は両立する。

しかしその二命題が両立するのは標準体系においてであって、現実の体系においてはではない。現実の体系は標準体系と生産方程式が同じであるから利潤率と商品価格は同じであるが、各商品ごとにその総生産量と総生産手段の比率が異なり（したがって相似な三角形を構成せず）、この証明の（図1に対応する）前件が満たされないからである。

標準体系が現実の体系と異なるのは、前者が「標準商品というただ一種類の商品を生産する」と見なせるという点においてである。標準商品を構成する個別的諸商品の数量比はそれら諸商品相互の交換比率、すなわち単純商品生産社会で妥当する《価値》である。この交換比率は、調整を受けた物量タームでの比率であるから、現実の体系においては成り立たない。現実の体系で妥当する価格は生産方程式によって決まる相対価格だけである。標準体系においては、標準商品がそれ自体の内部構成に潜ませている交換比率と生産方程式によって決まる相対価格とが、ともに妥当する。転形問題の原罪であった「価値と価格の乖離」は、標準体系においては物量次元での交換比率と価格次元での交換比率との乖離に対応する。しかしこの乖離はまったく無害な乖離である。標準体系は現実体系の価格を変えないで乗数 q_i^* によって構成されただけであり、標準商品と（賃金前払い型であれ後払い型であれ）生産方程式とはたがいに独立だからである。

[C] マルクスはもちろん標準商品を知らなかった。しかし彼は「賃金と利潤が近似的に標準商品の量からできていると仮定していた」と

見なすべきである。マルクスは個別的商品の《価値》から出発し「中位の資本構成」を仮定することで間に合わせたが、標準商品は全体の総計量から出発し、「中位構成の資本」を参照することなく、総資本における同一商品の総生産量と総生産手段の比率の均等化を達成する。標準商品を知らなくても到達する結果は同じであるから、標準商品を仮定していたと見なしてよい。

こういう次第で、スラッファは転形問題を大した問題だとは考えていないのである。彼はマルクスの転形論を批判したポルトケヴィッチに対して、次のように反批判を加えている。

しかし [ポルトケヴィッチに対する] 本当の反論は、彼の観点が、いくぶん些細な事柄 [転形問題——引用者] の中に絶対的正確さ [価値と価格の厳密な定義と区別——引用者] を手に入れるために、問題の本質的な性質——すなわち、商品が労働によって商品から生産されるということ——を（それを隠すことによって）犠牲にしている、ということである。(Bellofiore [2001], p.372. D1/91) (ただし [] 内と傍点は私の補充である)。

「労働によって生産される」とは、すべての生産過程は人間の労働過程だということである。「商品から生産される」とは、生産手段たる商品は労働生産物であるが、その労働生産物の「価値あるいは価格」を直接労働の単純和に還元することはできないということである。どの商品価値も「その商品に投下された直接・間接労働」であるが、間接労働の価値とは資本に属する生産手段の価値であるから、直接労働と同列に扱うことはできない。労働が投入されるということは、労働生産物の価値が直接労働の単純加算によって計算されるということではない。

3 労働価値論をめぐる概念的混乱

スラッファが「[マルクスは] 原始社会における個別の商品の交換に適用された労働価値論を以て始める」と述べた際の「原始社会」は、エンゲルスの謂う「単純商品生産の社会」である。そしていわゆる価値法則がそのまま妥当するのは単純商品生産の経済においてだとされる。しかし「単純商品生産」なるものは、社会契約説の「原始状態」と同様、歴史的事実を述べたものではない。それが仮定しているのは、たがいに独立な小生産者たちが彼らの生産物を、自由・平等の法原則のもとで、自己利益の最大化を目的にしてたがいに交換するだけの社会である。価値法則は「商品の価値は〈社会的労働〉によって規定され、商品はそのような価値規定に基づく等価物どうして交換される」という主張を含む。しかし労働が〈社会的労働〉になるのは、人間の労働が労働力商品として自由に売買される資本主義社会が成立してからである。単純商品生産の社会においては「社会的労働」という概念は成立しない。しかし他方、資本主義経済において交換を支配するのは《価値》ではなく生産価格である。すると、価値法則は資本主義成立以前には成立せず、資本主義成立後は妥当しないことになる。

それにも拘わらずマルクスはクーゲルマンに宛てた書簡で、価値法則を自然法則になぞらえ、「自然法則は一般に廃棄されうるものではない。歴史的に種々異なる諸状態のもとで変化しうるものは、かの諸法則が貫かれる法則だけである。……いかにして価値法則が貫かれるかを展開すること、これこそが科学です」と述べる。剰余価値論をマルクスはロートベルトゥスから剽窃したという非難に対して、エンゲルスが「価値法則を侵害しないだけでなく、むしろそれを基礎としながら、いかにして均等な平均利潤が形成されるのか、また形成されざるをえないのか」を、『資本論』第3巻の公刊以前に証明してみよと挑んだときも、価値法則は断乎

として擁護されている。そしてこの価値法則に含まれている「商品の価値は〈社会的労働〉によって規定される」という主張、これがマルクスの労働価値論の核心である。

それでは「社会的労働」とは何か。『資本論』は、商品の使用価値と交換価値の区別に対応させて、「具体的労働」と「抽象的労働」の違いに注目させることから始まる。具体的労働は具体的な生産にたずさわるが、抽象的労働は全面的な（つまり全社会的に行なわれる）商品交換を前提する。だから抽象的労働は、すべての生産物が商品化し（全生産物が売られるのみ生産され）、商品交換が全面化してはじめてリアリティを持つことができる。このようにしてリアリティを獲得する抽象的労働が社会的労働だということができよう。社会的労働は、商品の生産と商品の交換（あるいは流通）をとともに前提した概念であるから、「商品の価値は〈社会的労働〉によって規定される」のであれば、商品の価値もまた、商品の「生産」と「交換」という二つの場面で規定できる。（「価値どおりの価格」で交換される単純商品生産社会を仮定し、それを背景にして）生産の場面で規定したのが(1.1)の価値決定方程式（ $\lambda_i = \sum a_{ij} \lambda_j + L_i$ ）である。それに対して、（単純商品生産社会における生産を前提し、それを背景にして）交換の場面で規定したのが「価値＝交換比率」論である。（標準商品はその商品の構成要素となる各商品の数量比にすぎないから「価値＝交換比率」論の系譜に属する）。だから「商品の価値は社会的労働によって規定される」といっても、その二つのいずれによって規定されるのかは決められていないのである。

マルクスの《価値》が体化労働といわれるのは、それが間接労働（「死んだ労働」）をも、（過去ではなく）現在の直接労働（「生きた労働」）として計算するからである。しかし間接労働は生産手段として実現しているものであり、生産手段は資本に属するから、当然利潤率に従って評価される。だから体化労働は、生産と労働が分離していない単純商品生産社会か、あ

るいは資本主義社会であっても剰余がすべて賃金に吸収されるような極端な場合でなければ、存在しない。価値決定方程式がスラッフアの生産方程式の $r=0$ という極端な場合に一致するのは、この理由による。だから第1節で見たパシネッティとスティードマンはマルクスの《価値》を生産の場面でとらえていたわけである。

それでは標準商品の見方に従った場合、どのような違いが出てくるのだろうか。標準商品は標準体系における「不変の価値尺度」である。そして標準体系においては、どの個別の商品についてもその生産量と生産手段量の比率は同一である。もしも均等な比率で剰余を生むような単純商品生産の社会が存在するならば、それは当初から標準体系が実現している社会である。その生産方程式は、スラッフアが「剰余がある場合の方程式」として1927年に定式化した次式である。「 v_a 」「 v_c 」は商品「b」の商品「a」「c」に対する交換比率である。

$$(3.1) \quad \begin{aligned} v_a \Sigma A &= (v_a A_a + B_a + v_c C_a) (1+R) \\ \Sigma B &= (v_a A_b + B_b + v_c C_b) (1+R) \\ v_c \Sigma C &= (v_a A_c + B_c + v_c C_c) (1+R) \end{aligned}$$

標準商品は数量比でできているから、所定の数量比を持つ合成商品はすべて標準商品である。それが賃金や価格の測定尺度であるためには、その1単位を決めねばならないと思われるかもしれない。しかし単純商品生産の社会では賃金と利潤への分配問題は存在しないのだから、標準純生産量（＝総労働量）を1単位にとるという約束は必要でない。(3.1)式の剰余を賃金と利潤に分割すること自体が無意味なのである。生産物はすべて生産者の所有に属するのだから、交換比率がそのまま価値であり価格だからである。すべての商品は「価値どおりの価格」で交換されるのである。仮に総労働量を測定尺度の1単位にとったとしても、その労働は生産に投入された直接労働であるにすぎず、体化労働でも支配労働でもない。直接労働を「体化労働」と見なすのは、単純商品生産社会の生

産者の労働が生む（あるいは、リカードウ派社会主義者が唱えたような、剰余のすべてが賃金に吸収される理想社会の労働が生む）生産物は、すべて自分の所有に属するからである。そのいずれの場合においても利潤率は捨象されるので「価値＝価格」である。「支配労働」が存在しないがゆえに、直接労働は「体化労働」に同化し、両者の違いが見えなくなっているのである。

ところが、労働力が商品化し賃金と利潤とへの分配問題が生ずると、商品価格は利潤率の高低に応じて変化するから、価格はもはや「価値どおり」ではなくなる。つまり個別の商品については、体化労働によって規定される《価値》と価格との乖離が出てくる。そしてどの商品も《価値》ではなく価格によって売買される。生産手段たる商品も、《価値》ではなく価格で買われるのである。もし利潤率が与えられれば、どの商品もスラッファの生産方程式（あるいは価格決定方程式）によってその相対価格が決まる。生産手段は、間接労働（死んだ労働）であり、過去の直接労働の対象化であるから、間接労働には利潤率がかかってくる。そして、利潤率がかかってくる価値はもはや「体化労働」ではなく、リカードウもマルクスも拒否したあの「支配労働」なのである。

「支配労働」は価格を前提してはじめて定義される。私は第1節の(1.3)で、支配労働を次のように規定した。

$$(3.2) \quad \gamma_i = (1+r) \sum a_{ij} \gamma_j + L_i$$

これはスラッファの生産方程式を w で除しただけの式である。スラッファの「小体系」論も「日付のある労働」への還元もスラッファの生産方程式から導かれる。そして、商品価格を「日付のある労働」に還元した労働量は、小体系の方法によって決定される労働量に等しい。支配労働として等しいのである。松本は小体系の方法によって導かれる当該商品の労働量を投下労働（つまり体化労働）に等しいことを証明

しているが、それは価値決定方程式に基づいて計算するからである。だが、スラッファの生産方程式を基礎にすれば当該商品の労働量が支配労働に等しくなることも、同じ方法で証明できる。そして「日付のある労働」に還元すれば、それが支配労働でしかありえないことは一目瞭然である。この問題は以前の拙論でより詳しく説明したので、ここでは繰り返さない。

ところが片桐は『スラッファの謎を楽しむ』（2007）において、「スラッファが否定したのは労働価値論ではなく、労働価格論ではないのか」と示唆している。同氏の著書の第Ⅲ章第4節「否定されたのは労働価格論か労働価値論か」（107-114頁）を論理的推論のかたちで要約すれば、次のとおりである。

- 1 労働価値論とは「社会的必要労働が商品価値の実体だ」ということであり、労働価格論とは「商品の均衡価格が投下労働量に比例する」ということである（関根友彦）。
- 2 森嶋通夫は、社会的必要労働と体化労働とは同一であることを証明している。
- 3 森嶋はスラッファが小体系で示した方法を用いている（ロンカッリア）。
- 4 松本有一は、体化労働と社会的必要労働の同一性を証明し、スラッファと森嶋の方法が本質的に同じものであることを明らかにした。
- 5 体化労働と社会的必要労働の同一性の証明を見れば、スラッファはマルクスの労働価値論を擁護したと見るべきである。
- 6 スラッファは「均衡価格と社会的必要労働量が比例しない」ことを明らかにすることによって、労働価格論を明確に否定したというべきである。

片桐の間違ひは、「スラッファの方法と森嶋の方法が同じである」ということから、「スラッファはマルクスの労働価値論を擁護した」と推論する点にある。森嶋はスラッファと同じ方法を用いて、社会的必要労働と体化労働が同

一になることを証明した。そして松本は森嶋にならってそれを確認した。マルクスの価値体系の整合性を論じることが森嶋の目的であったから、森嶋は価値決定方程式に基づいて社会的労働と体化労働が一致することを示した。だからその範囲でマルクスの労働価値論を擁護できた。スラッファが「小体系」論で述べている方法は森嶋のそれを同じである。ところが、その同じ方法に従いながら、スラッファの生産方程式に基づいて商品価格と支配労働の一致を証明することもできるのである。そして、スラッファの生産方程式が価値決定方程式に一致するのは、剰余が全て賃金に吸収される場合（つまり、 $r=0$ の場合）だけである。

関根の謂う「労働価格論」は、それを排撃することを目的にしているので、「商品の均衡価格は投下労働量〔体化労働量〕に比例する」などという乱暴な定義になっているが、均衡価格を生産価格に置き換えれば、それはスラッファの生産方程式に基づく支配労働を意味している。片桐〔2007〕から重引すると、関根は次のように述べているのだ。

後者〔「商品の均衡価格が投下労働量に比例する」という主張〕は、労働価値説ではなしに、「労働価格論」とでもいうべきもので、一般的には正しくない。たとえば「全ての部門で資本の価値構成が等しい」とか、「剰余労働がゼロである」とかの特別の場合にしか成り立たない。(109頁)

マルクスの体系においては、「全ての部門で資本の価値構成が等しい」場合とは、価格が《価値》に等しい場合である。「剰余労働がゼロである」場合とは搾取のない場合であり、スラッファの体系に翻訳すれば、剰余がすべて賃金に吸収される場合（ $r=0$ の場合）である。スラッファにおいては体化労働は特殊な場合にしか出てこないのであるから、これこそまさに「労働価格論」である。すなわち、商品価格は支配労働によって規定されるのである。

片桐の陥っている概念的混乱を整理して上に見た同氏の推論を書き直せば、次のようになる。書き直しの部分には下線を付した。

- 1 労働価値論とは「社会的必要労働が商品価値の実体だ」ということであり、労働価格論とは「商品の生産価格は支配労働量に比例する」ということである。
- 2 森嶋通夫は、社会的必要労働と体化労働とは同一であることを証明している。
- 3 森嶋はスラッファが小体系で示した方法を用いている（ロンカッリア）。
- 4 松本有一は、体化労働と社会的必要労働の同一性を証明した。しかしスラッファと森嶋のとした証明方法は同じでも、森嶋が価値と体化労働との一致を証明したのに対し、スラッファは価格と支配労働との一致を証明した。
- 5 体化労働と社会的必要労働の同一性の証明はマルクスの労働価値論を擁護したことになるが、その証明はスラッファが意図したところのことではない。
- 6 スラッファは「生産方程式が $r=0$ の場合においてのみ、マルクスの《価値》が妥当する」と見なし、マルクスの労働価値論を否定した。

マルクスの体化労働とスラッファの支配労働と違いが敵対的な対立として現われるのは、賃金の扱い方においてである。マルクスにあっては、賃金は労働力の価値が転化したものにすぎず、労働力商品の価値は、生産手段たる他の商品と同じように、労働力を再生産するために必要な生活資料に体化された社会的必要労働である。ところがスラッファの生産方程式を次のように

$$(3.3) \quad L_i w = p_i - (1+r) \sum a_{ij} p_j$$

書き換えれば明らかであるが、スラッファの「賃金」は、右辺に現われる「商品の価格」と

同じ資格で左辺に現われる「労働の価格」である。商品が価格 p を持つように、労働は価格 w を持つのである。そして、マルクスが「労働の価格」を「黄色の対数というのと同様に不合理である」と糾弾したことは周知の事実である。だから、スラッフアがマルクスの労働価値論を捨てたか否かを判定する決定実験は、賃金が労働力の《価値》であることを否定できるか否かという点に存する。

スラッフアは1943年ボルトキューヴィッチの「マルクス体系における価値計算と価格計算」を読んだ。そのコメントが黒表紙の小さなノートとして遺稿の中に含まれていた。次の引用はその一部である。

マルクスのしていることは、一方で、(1)賃金を生存のために商品で与えられたもの(必需品目録)と見なし、他方で、(2)利潤の全体を労働生産物の一定の割合と見なすことである。この二つの観点は首尾一貫せず、矛盾に導かざるをえない。ところがB [ボルトキューヴィッチ] は、(2)を(1)に合わせることによってその矛盾を解こうとする。そうではなくて、正しい解決は(1)を(2)に合わせることなのだ。というのは、(1)の観点は出発点としては有用なのだが、賃金における[家畜の]飼料や[エンジンの]燃料の側面しか考慮しておらず、まだなお商品物神崇拜に汚されている。賃金における収益の側面をはっきり出すことが必要である。そしてそれは、賃金を w と見なすか、あるいは収益の中に占める割合と見なすことによってなされる。これが、(2)に一致せしめられた(1)である。そしてまた、利潤率のためには全資本が考慮に入れられねばならないという結論が真となる。

(もし、賃金は前もって支払われていなければならぬ、だから具体的な財によって固定されている、という反論が提起されるならば、その答えは、 w の問題とは前払いされた賃金が生産物の中から返済されるという問題だ、ということである)。(Bellofiore [2001],

pp.371-2, D1/91)

この文章の主旨は、生存賃金部分を「家畜の飼料やエンジンの燃料」と同列に扱うという表現を含めて、『商品の生産』§8の主張と同じである。マルクスは、一方で(1)賃金を生存に不可欠な商品で規定し、他方で(2)利潤を労働生産物の一定の割合と見なしている。正しい解決は(1)を(2)に合わせることである。そのためには、賃金における収益の側面をはっきり出す必要がある。そしてそれは、賃金を賃金率 w と見なすか、あるいは収益の中に占める割合と見なすことによってなされる。「賃金を w と見なす」とは、賃金が貨幣賃金で支払われるということであり、「賃金を収益の中で占める割合と見なす」とは、賃金が利潤と同じく剰余の一部として生産後に「後払い」されるということである。この二つは「あるいは」で繋がれているが、「かつ」で繋ぐこともできる。実際、生産方程式は賃金 (Lw) が後払いされる方程式になっている。

ところが『商品の生産』§8については多種多様な批判があるらしい。片桐も1節を割いて(第三章3節「労働力を商品とすることの意味」)それらの批判や解決案を紹介している⁽³⁾。しかしスラッフアにおいては、賃金は貨幣で後払いされる剰余賃金なのであるから、賃金は「労働の価格」であって、「労働力」という概念は存在しない。これはマルクスとの決定的な訣別である。だから「労働力の価値」を措定することによって定義されていた諸概念はすべて修正を受ける。だが他方、労働者の生存に必要な基礎財をどのように扱うかは、スラッフア自身の問題である。賃金の二つの構成部分のうち「生存」部分は生産手段の中に含め、「剰余」部分だけを変数として扱えばよいが、そうすると生産方程式が複雑になる。だから、「伝統的な賃金概念をみだりに変更することは控えて」、賃金全体を一つの変数として扱うことにする。ところがそうすると、例えば賃金がそれ以下には下落しえない下限を設定するというような弥

縫策が必要になる。「いずれにせよ、以下の議論は、慣用的でないとしてもより適切な賃金の解釈に、容易に適應させることができる」。しかしどのように「適應させる」かをスラッファは述べていない⁽⁴⁾。(もちろん、それを知らなくても、§9以下を理解するためには何ら支障はない)。

しかし、だからといって片桐のように§8からスラッファの「真意の隠蔽」を読みとることは不可能である。同氏の論拠は『商品の生産』を誤読するという、まったく別の話である。「アダム・スミスからリカードにいたる古い古典派経済学者の立場に立つ」(序文)こと、「伝統的な賃金概念をみだりに変更することを差し控える」(§8)こと、「古典派経済学者の着想を放棄する」(§9)こと、この三つを連結させて理解不可能だということである。だが実際には理解し難い点はどこにもない。どの文も、もとのコンテキストの中に戻せば明確な意味を持っている。序文の一文は、限界理論に対抗して私[スラッファ]の本は古典派の立場だといっているだけである。§8の文は、賃金の「剰余」部分と「生存」部分を分離して扱うのが適切なのだが、「この書物では、伝統的な賃金概念をみだりに変更することを差し控えて、賃金の全体を変数として取り扱う慣例的な方法にしたがうことにする」である。§9の文は、「以下では、賃金が生産物の一部分として事後的に支払われるものと仮定する。だから、〈前払いされた〉賃金という古典派経済学者の着想を放棄することになる」である。いずれも意味明瞭である。「伝統的な賃金概念をみだりに変更することを差し控えて」は、これを省いても論理の筋道はきちんと理解できるような軽い挿入である。「賃金が事後的に支払われるものと仮定する」ので、古典派経済学者の[賃金前払いという]仮定を放棄することになるということのも、いわばトートロジーである。「真意が読み取れない」のは、「伝統的な賃金概念をみだりに変更することを差し控える」ことが「古典派経済学者の着想を放棄する」理由だ(片桐

[2007], 75頁, 98頁) というような、滅茶苦茶な繋ぎ方をしているからである。

最後にスラッファ文書に含まれている彼自身の見解を紹介しておこう。彼は『商品の生産』の書評を準備していたガレニャーニの問い合わせに対して、賃金の取り扱いについて次のように答えている。

人びとが私の体系について、それが資本と労働との相対的供給という[新古典派の]理論の「基礎」として提示されていると考えることを止めさせるために、私は信号を出したかっただけです。重要だと思われるのは否定面なのです。肯定面については、分配を変えることに関して人間のあらゆる行為を、(それがどちらの方向に向いていようと)不毛にしてしまうような自然的・技術的条件、あるいは偶然的条件すらも含めて、そういう条件によって分配が決定されると主張するところの、いま一つ別の機械的な理論を提出するつもりはまったくありません。(Bellofiore [2001], p.367. D3/12/111:149)

スラッファは理論家に相応しい抽象能力を持っていた。だからといって彼は現実を見る目を持たなかったのではない。まったく逆であって、若い頃の彼とグラムシとの意見の違いはスラッファの現実感覚によるものである。また、ナチスのオーストリア併合直後に一時帰国しようとしていたウイトゲンシュタインに宛てた書簡を見れば、スラッファの観察の鋭さと判断的確さが分かる。『商品の生産』には現実の具体的問題はまったく出てこないが、しかし森嶋通夫のように『商品の生産』を「現実問題意識ゼロの観念論」(片桐 [2007], 14頁)と評するのは不当である。スラッファ自身は「自分のモデルはマルクスのモデルによって描写されるのと同じ現実の、すなわち、労働者と資本家の階級的敵対関係と資本家による労働者の搾取によって特徴づけられる現実の、いくつかの側面を描いていると確信する」と述べた(Potier

[1991], p.77)。

日常の日本語としての「現実」は実感信仰を背負っており、多くの日本人は「階級的敵対関係」を実感しない。それどころか、どんな理論も「現実」から遊離しているとすら思っているのだ。現実 (reality) とは命題を真ならしめるものの全体である。真なる命題は無数に存在するから、科学は一般的・抽象的な現実を記述するのである。実感信仰だけで生きるのであれば科学は不要であろう。『資本論』第3巻のある段落でマルクスは人間の全面的解放というユートピアを抽象的な言葉で述べた。だがその抽象的叙述の直後に「労働日の短縮が根本条件である」と叫んでいる。スラッファの『商品の生産』は経済学者に向けて書かれたのであるから、マルクスのような言葉は不要である。しかし彼の論理の背景には、「人間のあらゆる行為を不毛にさせるような機械的理論」に対するのと類似の反感と批判が、賃金の取り扱い以外の問題にも潜んでいるに違いない。スラッファ文書からそれを読みとれるか否かは読み手の能力の問題である。

『商品の生産』の公刊後いくつかの書評が現れた。ベッロフィオーレとジャン・ピエール・ポティエの論文「ピエロ・スラッファ：伝記とイタリアにおける『商品の生産』の受容に関する新資料」の第10章「スラッファとイタリアにおけるマルクス主義:最初の衝突」には、初期の書評に対するスラッファの反応が述べられている。『商品の生産』に対する初期の書評でスラッファが謝意を表したのは、イギリスのマルキストでグラムシの翻訳にも関わったジョン・イトンだけである。スラッファは、標準商品についてのイトンの「この奇妙な装置が必要である理由は疑わしい」などという批判にも拘わらず、彼の書評を高く評価した。イトンの議論が「独創的で興味深い仕方で展開されていた」からである。

逆に、スラッファにとって最も不愉快な書評はロドルフォ・バンフィによるタイプ原稿のそれであった。そのタイプ原稿には、「隠れた気

難しさ」「番号づけの性癖」などの語句が判読できる程度に消されていた。スラッファはバンフィの書評が「当てつけを混入させたおもねり」であると見なした。スラッファにとって堪えがたいことは、主張されている命題の真偽を問わないで「難解な論理」とか「具体性の欠如」などと難癖をつけられることであった。だから彼は「各人が『商品の生産』を自分の流儀で読むにまかせる」ことにした。これはマルクスが好んだダンテの言葉「汝の途を歩め、そしてひとの語るにまかせよ」と同じである。真理だけが問題なのであり、世評などどうでもよいことである。彼は「何が真理であるか」「何が現実であるか」という問題から逸脱した議論に対しては、沈黙することにしたのだ。「語りえない」がゆえに沈黙したのではなく、駆け引きでしかないような不毛な議論に参加しなかっただけである。

注

- (1) ヘーゲル弁証法と『資本論』との関係は答えにくい問題である。何を以て「弁証法」と称するのかが不定だからである。弁証法のキーワードは「変化」と「全体」である。(a)それ自体が変化しない概念によって「変化」を述べようとすれば、「ある性質を持ち、かつその性質を持たぬ」という矛盾した表現が必要になる。(b)真理は「全体」に存するが、「全体」を一挙に述べることはできないから、部分から全体への思考の運動が必要である。この二つに加えて、さらに(c)ヘーゲル弁証法は思惟と存在の一致という原則を要請する(この要求によって弁証法は「高等な」論理学だと僭称される)。しかし(c)の要請は過大な要求であるから、これを放棄する。すると弁証法はたんに「叙述の方法」であるにすぎなくなる。だから、弁証法的な叙述が現われるのは理論展開の新局面においてである。

例えば、貨幣から資本への転化についての叙述：「まだ資本家の幼虫として現存するにすぎないわが貨幣所有者は、商品をその価値で買い、その価値で売り、しかもその過程の終わりには、彼が投入したよりも多くの価値を引き出さねばならぬ。幼虫から成虫への彼の発展は、流通場面で行なわれねばならず、しかも流通場面で行なわれねばならぬ。以上が問題の条件である。ここがロードスだ、ここで跳べ！」。(長谷部文雄訳『資本論』1、

績文堂, 313頁)

また、資本蓄積についての叙述:「商品生産および商品流通にもとづく取得法則または私的所有法則は、それ独自の・内的な・不可避的な・弁証法によって、その正反対物に転変する。本源的操作として現れた等価物どうしの交換は、一変して、仮象的にのみ交換されるようになる」。(同上、『資本論』2, 909頁)

スラッフアは、マルクスが弁証法的叙述(価値法則とその弁証法的展開)を必要とした理由を(商品価格と利潤率の)同時決定方程式を知らなかったという点に見る。しかしマルクスの叙述は、「自由・平等・ベントム」と要約できるイデオロギーに対する批判でもあるので、それがマルクスの理論に「生氣を与えている」のである。

- (2) パシネッティは同じ本の付論において、標準体系においては総計一致の二命題が成立することを別に証明している(Pasinetti [1989] の第5章付論 “Il problema della 《trasformazione》 dei valori in prezzi di produzione”)。標準体系は、分配問題から独立の標準商品と生産方程式との結合体であるから、標準体系においては、第2節で見えるように、転形問題は解決する。転形問題は、個別的商品における《価値》と生産価格の乖離にも拘わらず、それらが総計において一致することの証明を要求しているのだから、 v と p が完全に一致すれば転形問題は生じないし、いかなる一致も存在しないならば証明は不可能である。個別的には乖離するが総計においては一致することを証明するための最短距離は、標準商品に訴えることである。
- (3) 「労働力は商品か」という問いは曖昧すぎる。労働力の価値が他の(生産手段に属する)諸商品の価値と同じように同じ関係の中で決まるか否かが問題である。マルクスは『経済学哲学草稿』でこう書いた。「労働はたんに商品だけを生産するのではない。労働は自分自身[労働力—引用者]と労働者とを商品として生産する。しかもそれらを、労働が一般に商品を生産するのと同じ関係の中で生産するのである」(城塚登・田中吉六訳, 岩波文庫, 86頁)。スラッフアの賃金の扱い方からは「資本主義が顛倒した社会である」という強い批判は出てこない。
- (4) どのように「適応させる」か。私の解釈は次のとおりである。「賃金を必要部分と剰余部分に2分割して扱う($w = w_N + w_S$ と置く)ことにすれば、 w_N は生産手段の一員たる「労働力」商品の価格である。この「労働力」は他の生産手段と同じ資格でそれ自身の生産方程式を持つと考えよ。すると、新商品の生産方程式と新しい未知数 w_N がそれぞれ1個ずつ増え、「 $w+r/R=1$ 」の代わりに「 $w_S+r/R=1$ 」が成り立つだけである。他方、賃金を分割せず

その下限を設定する(w_{\min} とする)場合には、どの生産方程式の生産手段の項にも生存賃金部分が—『商品の生産』第4節の「 $A_a p_a + B_a p_b + \dots + K_a p_k$ 」($1+r$) = $A p_a$ 」などと同様—インプリシットに含まれていると見なせばよい。だから正確には「 $w+r/R=1$ 」ではなく「 $w+r/R=1+w_{\min}$ 」が成り立つ。これによって利潤率と相対価格も変わるから、 w_{\min} も変化しうる。もし必需品の生産方法に改善があれば w_{\min} は低下し、それによって利潤率は上昇する。しかし生産方程式のシェーマは不変である。

「適応させる(adapt)」とは(「§11で提示される)賃金後払いの生産方程式を調節する(adjust)」ことである。賃金後払いの生産方程式を「賃金=生存賃金+剰余賃金」という解釈に合うように調節するのである。しかしまだ提示されてもいない賃金後払いの生産方程式を、どうして「調節する」ことができようか。だから、「いずれにせよ、以下の議論[賃金後払いの生産方程式—引用者]は、慣用的でないとしてもより適切な賃金の解釈[賃金は生存賃金プラス剰余賃金だという解釈—引用者]に、容易に適応させることができる」と保証するにとどめたのである。

文献

- Bellofiore, R. [2001], Monetary analysis in Sraffa's writings: A comment on Panico, in Cozzi and Marchionatti (eds.), *Piero Sraffa's Political Economy, A Centenary Estimate*, Routledge, 2001.
- Bellofiore, R. [2007], Sraffa after Marx: an open issue, in Chiodi, G. and L. Ditta (eds.), *Sraffa or an Alternative Economics*, Palgrave, 2007.
- Bellofiore, R. and J-P. Potier [1998], Piero Sraffa: Nuovi elementi sulla biografia e sulla ricenzione di *Produzione di Merci* in Italia, *Il Pensiero Italiano*, VI (1998/1).
- 藤田晋吾 [2001], 『スラッフアの沈黙』, 東海大学出版会。
- 藤田晋吾 [2007], 「体化労働, 支配労働, 標準商品」, 『流通経済大学論集』Vol.42, No.1, 25-40頁。
- 片桐幸雄 [2007], 『スラッフアの謎を楽しむ』, 社会評論社。
- 片桐幸雄 [2008], 「スラッフア経済学へのいざない」, ちきゅう座・スタディールーム, chikyuzanet/modules/news2/article.php?storyid=133138140 (2008/07/26).
- 松本有一 [1989], 『スラッフア体系研究序説』, ミネルヴァ書房。
- 松本有一 [2005], 「スラッフアは『転形問題』を解決したのか」, 『経済学雑誌』第106巻第3号, 80-91頁。
- Pasinetti, L. [1989], *Lezioni di Teoria della Produzione, Seconda Edizione riveduta e ampliata*, Mulino.

Pasinetti, L. [2007], *Keynes and the Cambridge Keynesians*,
Cambridge University Press.
Potier, J.-P. [1991], *Piero Sraffa, Unorthodox Economist*,
Routledge.
Sraffa, P. [1960], *Production of Commodities by Means*

of Commodities, Cambridge University Press.
Sraffa, P. [1960], *Produzione di Merci a Mezzo di Merci*,
il Einaudi.
Steedman, I. [1977], *Marx after Sraffa*, NLB, Verso edition
(1981).